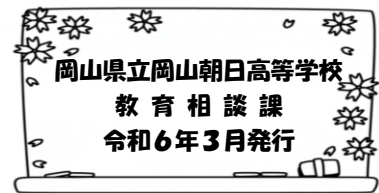


相談課 イマ

* 第76号



年度のしめくくりの時期を迎え、1年を振り返り、皆さんの中にはどのようなことが想起されるのでしょうか？楽しかったこと苦しかったこと、それぞれ多岐にわたることと思います。新しい年度が始まる前のこの貴重な時間を、ぜひ自分自身を振り返り、新たに始まる次のステージへの準備と飛躍につなげてもらいたいと思っています。相談課便りでは、皆さんとともに歩み、皆さんの成長を見守る相談課の先生方のエッセイを掲載してきました。今回は校長先生にもお願いして書いていただきました。様々な角度から綴られた文章、そこから新たな気づきや発見が生まれればと願っています。

放物線の軌跡

校長 平田 善久

「水平のゴールを頭上に設置する」

1891年、バスケットボールの考案者ジェームズ・ネイスミス博士が、最初に決めた5原則は今も変わっていないが、その中でもこの原則は、他のスポーツとの差異をもたらしている大きな理由となった。

他のゴール系スポーツは垂直にゴールが設置される。そうなのだ。バスケットボールはつまるところ玉入れなのだ。そのため、放物線のシュートが生まれた。

先のネイスミス博士は、冬場に運動量を増やすためのスポーツとしてバスケットボールを設計したため、ゴールを適度に離し、全員を攻防に関わらせた。この目的は見事に達せられた。その影響を受けたのが、この私であり、中学校から大学まで、10年間もコートに多量の汗を落とし続けた。

博士は、当初の目的が、今も変わらず果たされていることを喜んでいるだろうが、バスケットボールの高度化に伴って、これほどフルスピードでダッシュする、ストップする、巧妙にドリブル・パスを行う、複雑に協力してノーマークを創る姿は予想だにしていなかっただろう。

だが、当時と変わらず、常に最後は非常に繊細なタッチでのシュートで終わる。

「シュートに結びつく連繋的な戦術」。これがバスケットボールの本質だ。パスやドリブル、プレーヤーの動きという戦術を駆使してボールをゴールに進めるが、最後をシュートに託す。その技術を頼みに味方はボールを運ぶのだ。

バスケットボールは、一般としての他のゴールスポーツと同様に、シュートこそが最重要なものとなっていることは勿論、特殊なスポーツ（個々のスポーツはそれぞれ特殊）としてのバスケットボールは、一部を除いて力任せでは1本のシュートも入らず、必要なのは美しい放物線なのだ。

ゴールを通過していく放物線を考える。そのことは人生も同じかもしれない。



心を伝える言葉の力

五百蔵 愛

私は言語的コミュニケーションがあまり得意ではない。養護教諭という職に就いているのにこれではいけないと思い、何とか克服しようと関連した自己啓発本を読んだり、一昨年度の中堅研修の一環として同僚にコミュニケーションのポイントを聞いたりしていた。自分の個性を自己開示することが苦手で、個性的な人間だと思われたくないから、いつもあたりさわりのない「普通」の返答を考えながら会話することが苦しかった。相手とどのようにコミュニケーションをとったらいいかと考える中で、非言語的コミュニケーションで会話をする、相手を観察することが自分のくせになっていることに気づいた。これは今の保健室での養護教諭という仕事に生きている。言語的コミュニケーションが苦手だからこそ、相手の表情や仕草、声のトーン、服装、持ち物などの非言

語的なものを観察することで自然と相手への理解を深めていると感じた。私の周りには、私の天然キャラを面白がってくれる優秀な友人や先輩、後輩がいる。私は、自分には価値がないと悩み苦しんでいた時、その人たちにたくさんの励ましの言葉をもらった。自分が話すことで笑われるかもしれない、おかしいと思われるかもしれないと言語的コミュニケーションについて相談すると、「あなたはありのままで、自分らしく、自分にできる範囲のことをやって伝えていけばよいのだ。」と言ってくれた。人を笑わせているという新たな視点で話をしていると思えば良い。私が周囲の人たちに励まされた言葉は、私自身、養護教諭になった頃から保健室で生徒たちにいつも伝えていた「ありのままの自分を受け入れてあげる」「自分らしく生きていこう」というその言葉だった。私は私自身が助けられた言葉を生徒たちに今までもずっと伝え続けてきたのだと気づいた。自分の価値観を自分らしく言葉にして相手と触れ合いたいという思いが大切である。自分の価値観を共感してくれる人は必ずいるし、新しい角度（視点）を面白がってくれる人も必ずいる。

私は言語的コミュニケーションが苦手だと思っていたが大切なことは伝えることができていたことに少し安堵している。これからも非言語的コミュニケーションを大切にしながら、大切なことは私自身の言葉でしっかりと伝えていきたいと思う。よい言葉や思いやりのある言葉は、相手を救う時がある。言葉は心に残るので、みんなも人に対して思いやりのある言葉が言える人間になってほしいと思う。

あなたの言葉で救われる人は必ずいる。私のように・・・



やさしい洗濯機

柴田 みさえ

少し前に我が家にやってきた洗濯機なかなか賢い。洗濯したいものを放り込み、スタートボタンを押すだけ。指定容器に入れておくだけで洗剤も柔軟剤も勝手に量って投入してくれる。紙の説明書もあるが、大体はタッチパネルで誘導してくれるので、いちいち取扱説明書を読む必要もない。何回かの使用ごとにお手入れサインがタッチパネルに表示される。考えることも覚えておくこともなくなった。さらに洗濯をする時間によって、「朝早くからご苦労様です。」「遅くまでご苦労様です。」のセリフ。洗濯が終了して間を置かずに取り出しに行くと「すぐ取りに来てくれてありがとうございます」と画面で言ってくれる。初めは「こんな機能はいらんな」と思っていたが、気が付くと表示が現れる時間内に洗濯物を取り出しに行ったり、「自分は頑張っているな」と思っている。コンピューターで制御された、何でもないような言葉でも影響力はあるようだ。ポジティブな声掛けがもたらす力とその必要性を再認識した気持ちだ。でも、できれば人間に声掛けをしてもらいたいとも思う。教員になった頃、手書きの試験にこだわっていた先生が確か、「ワープロでの試験は何か冷たい感じがする。」と言われていたが、そのような感覚も大切だと思う。学校現場でもクロムが導入され、保護者メールで情報が伝えられることも多くなった。そのうち生徒たちが登校すると保護者の携帯に「登校しました」の情報が届き、登校していない場合は欠席理由を選択肢から選んで送信する時代もすぐにやってくるかもしれない。「今日は来てるかな」と教室をのぞいたり、「体調不良」という理由について、「何かうまくいかないことがあるのか、何かあったのか」と心配する機会が奪われてしまうことが心配される。忙しく時間に追われる毎日ではあるが、やはりコミュニケーションには手間をかけたいと思う。しかしながら、人と人のコミュニケーションの仕方も様変わりしているようだ。知り合いの中学校の教員からある日の大掃除のくだりを聞いた。「先生、何するんですか」「床を拭くから雑巾やな」雑巾を手を持った生徒数人が「これ、濡らすんですか」「床を拭くからな、濡らしといで」「濡らししてきました。どこから拭くんですか」「教室の前の隅っこからね」「みんなですか?」「分担すればいいよ」じゃんけんタイムを経て、「えー俺のどこなんか汚いやん」「ん?じゃーけん掃除するんやん・・・。」短いラインのようなやり取りが、生活の様々な場面で行われているのだと感じる。中学生という年頃だからだろうか、いやいやや似たようなやり取りは高校でも見られている。きちんと間違いなくやりたい生徒。失敗しても自分で考えて行動してほしい大人。効率の良さが優先されて短くなる言葉によるコミュニケーション。考えるといろいろ心配になるが、大掃除の場面で起こったこの短いやり取りがどのような声色と表情でなされたのかを想像すると面白くもある。少なくとも我が家の洗濯機とのコミュニケーションよりは楽しいだろう。AIがどんどん生活に入ってくる現代。人工知能に負けないコミュニケーションとは何だろうとぼんやりと考えている。

